

集落全世帯がホタルの里の会を結成、関係団体と連携し再生活動

30. 細越ホタルの里【青森県青森市】

範 囲	青森市の中心部から南西へ約4~5kmに位置する細長い集落(細越地区)の裏山	
所 在 地	青森県青森市細越	
生 物 地 理 区 分	ミズナラ林	
環 境 要 素	畑(), 二次林、小川・水路、水田、ため池、人工林	
自然条件	地 形	青森市は、東部と南部は奥羽山脈の北端に位置する八甲田連峰等の標高900~1,500mの山地や火山地に、西部は梵珠山一大倉岳山地とそれに続く標高200m前後の丘陵地(大釈迦丘陵)に囲まれている。
	植 生・生物等	ゲンジボタル(北限)は山あいの清流域、ヘイケボタルは田園地域(遊休水田)と、本来は生息域が分かれているが、細越地区は、この両方の自然条件を満たす昔ながらの農村風景を守り続けてきた。
社会条件	人口(市町村)	299,429人(農家率2.9%、副業的兼業農家が多い) 青森市のデータ(H22年)
	土 地 利 用	市総面積の10.5%が田畑、68.8%が山林である。 青森市のデータ(H22年)
	歴 史・文 化	国の重要無形文化財、日本の火祭り「青森ねぶた祭」や、日本最大級の縄文集落跡で国の特別史跡「三内丸山遺跡」、さらには、昨年、生誕100年を迎えた世界的版画家・棟方志功画伯の版画などに代表される伝統と歴史、文化等、多くの資源、財産がある。
法指定、行政による評価の状況	自然環境・景観保全や国土保全に関わる地域指定等	該当なし
	すぐれた自然、景観、伝統文化などとしての選定	農水省、農村環境整備センター「田園自然再生コンクール オーライ!ニッポン賞」受賞(H15)



撮影時期：2008年9月
ゲンジボタルの生息地を保全するために、決壊したため池・水路や荒廃した水田の復元に努めるとともに、生物多様性環境に配慮しながら整備

細越ホタルの里				
取組主体	タイプ	地元集落等:集落、地権者など地元の関係者が中心となった取組		
	主な主体	名称	概要	
細越ホタルの里の会		平成5年、集落の在住者全員を会員として設立され、農業者が会の中核となり活動を企画運営している。		
経緯	<p>1990年、この地区の用水路でゲンジボタルが発見された。しかも調査の結果、同じところにヘイケボタルも繁殖するという珍しい場所であることが分かった。これをきっかけに地元では「ホタルを保護しよう」という気運が高まり、3年後「細越ホタルの里の会」が発足した。</p> <p>会では、ホタルの棲みよい環境づくりのため、休耕している水田の復元や平野部に広がる水田地帯の一角に水田を活用したビオトープを造成。基金を活用し、ホタル水路の保全のための土嚢袋や維持管理のための草刈機等資材の提供を受けて保全に努めている。さらにホタルの生態観察・調査研究のための顕微鏡や図鑑等を購入し、さらなる保護活動を展開している。</p>			
支援措置	該当なし			
取組の目的・目標	ホタルの保護及びホタルの生息環境を将来にわたって持続させること。			
取組分野内容	農林業を通じた里山や草地の利用(管理)の維持・活性化	該当なし		
	バイオマスなど新たな資源としての利用	【対象となる資源】 該当なし		
	環境教育や自然体験、エコツアーの場としての利用	自然観察会	チョウの生息状況から見た植生環境調査	
		環境教育・学習活動	ゲンジボタルの生息状況調査と人工飼育・放流	
		里地里山体験・環境保全	歩くスキーによる冬山源流探検	
		農林業体験活動	体験農園における花や野菜の栽培と収穫活動	
		エコツアー	毎年7月上旬の三日間に「細越ホタルまつり」を開催	
	その他			
野生動植物やその生息地の保全・管理	土砂の浚渫・草刈り・土留め・清掃などによる水田・水路・ため池の保全。 ゲンジボタルの飼育と採卵から幼虫飼育・放流による個体数の確保。			
地域の良好な景観の保全・修復	災害による決壊・埋没に伴う改修に際しては、コンクリート類を使わず、できるだけ元の状態に復旧している。 また、遊休地の草刈りを行うとともに、花の植栽に努めている。			
里地里山の伝統的な生活文化の知恵や技術の継承	対象	生活行事	【文化財指定】	
		資源利用技術		
		その他		
		該当なし		
連携・協働	<p>本地における取組みは、ほとんど地域住民が主体だが、毎年7月上旬の三日間にわたる「ホタルまつり」では、団体・企業の協賛や交通指導隊の支援を受けている。</p> <p>また、まつり期間の直売所では農協にも参加いただいている。</p> <p>「ホタルまつり」には三日間で5,000人の見学者が訪れ、メイン会場となる広場は小学校の敷地で、駐車場は企業(観光バスと自動車整備工場)から借りることで、まつりの開催が可能となっている。</p>			



撮影時期：2005年7月

ゲンジボタルの生息地は、耕作田に囲まれています。それに囲まれた水田は休耕していますが、毎年手入れをします。子どもたちとの清掃活動もその一つです。

撮影時期：

野菜などを買い求める見学者で賑わう「細越ホタルまつり」

景観としての
利用・評価

不明

取組の特徴

ホタルの保護に向けた地域主体の地道な取組が実を結び、地域活性化にも寄与している。
町在住の全220世帯が「細越ホタルの里の会」を結成。農事組合、学校、福祉協議会等各団体が協働し、北限のゲンジボタル・ヘイケボタルの生育環境保全を軸に、自然再生に取り組む。その他、自然観察会や生息状況調査を行うほか、毎年開催する「細越ホタルまつり」も定着し、農産物直売所なども盛況である。
近年の都市化によって、ゲンジボタルの生息地も年々少なくなっている。本地域は「三内丸山縄文遺跡」の上流に位置するため、縄文人が見たホタルを今も見ていると考えており、5千年続いた命の光を、今にして絶やすということだけは避けなければならないと、地域住民は誓っている。

【参照資料】

青森県 HP (<http://www.pref.aomori.lg.jp/>)

青森市環境計画 (H12.3)

仙台放送ウェブサービス (<http://www.ox-tv.co.jp/>)

機関誌「市政」(平成16年3月号)

農地・水・環境保全向上活動技術サポートWEB (<http://www.inakajin.or.jp/midorihozen/06/>)